

TRANSITION TO HEALTH (014)

風邪・インフルエンザ予防 ⑤

ワクチン先進国・アメリカに学ぶ

～「ワクチン強制接種」の大失敗と「無効」報道～

はじめに

欧米では、今やインフルエンザ・ワクチンに効果が無いことは、製薬会社やワクチンメーカーと利害関係のない中立的立場の研究者や医学者・医療ジャーナリストから正式に報告されており、ワクチンによって免疫力が下がること、かえって重症化しやすいこと、ギラン・バレー症候群や自閉症などの副作用や、自己免疫疾患や癌、難病などを引き起こす危険性があることも報告されています。ただ、日本のメディアが伝えていないだけです。

しかし、日本ではワクチン接種推奨の意見も強く、予防接種体制を世界標準に近づけようと、製薬会社・ワクチンメーカーと利害関係のある機関の研究者・医学者からは、「学童集団接種は高齢者の超過死亡（インフルエンザ関連死亡）を低下させる効果があった」「学童集団接種により、ワクチン非接種の高齢者の感染の防止、重症化阻止に効果があった」「学童集団接種が日本の幼児死亡を抑制していた」等々の報告がなされています。しかし、利害関係のない中立的立場からの信頼できる「ワクチン有効」との報告はありません。

健常者にとっては軽い症状の季節性インフルエンザのワクチンを、過去に流行したウイルス（恐れられている新型ではない！！）をもとに作られたワクチンを、副作用の危険性の高いワクチンを敢えて打つのか、自然治癒力で対処するのか、自分自身で決めるしかありません。私は、皆さんの健康と安全を第一に考えてお話しているのです。

危険なプレパンデミックワクチン・・・米国の大失敗（1976年）

「ワクチン先進国アメリカのワクチン災禍」については、健康通信しずおか No.7 にも書きましたので参照してください。今後、社会的予防論の立場から、予防接種が「強制集団接種」という方向に進む可能性もあり得ます。恐ろしい限りです。実はかつて、アメリカでは「強制接種」の大失敗例があったので紹介します。

1976年2月5日、米国ニュージャージー州の陸軍訓練基地内で、豚インフルエンザが発生した。19歳の二等兵が、発症から24時間以内に死亡した。集団感染が危惧され、H1N1型スペイン・インフルエンザの再来かと思われた。時のフォード大統領は同年3月24日、緊急予防接種計画を宣言し、8か月後の1976年10月から予防接種を開始したが、著しい副作用のため同年12月16日に接種は中止に追い込まれた。アメリカ人4,565万人に接種した時点で、副作用のギラン・バレー症候群（両足の麻痺や疼痛、知覚異常、呼吸困難などを引き起こ

公益財団法人 静岡県産業労働福祉協会

〒421-0113 静岡市駿河区下川原6丁目8番1号

TEL054(258)4855(代) FAX054(258)4403

<http://www.kenshin-shizuoka.net>

E-mail:info@kenshin-shizuoka.net

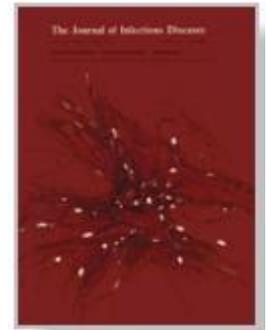
す急性多発性神経炎)が565人に発症し、30人以上が2か月以内に死亡した。また、30人の高齢者が予防接種を受けてから数時間以内に「説明不可能な死」を遂げていたことも判明した。しかし、パンデミックは起こらず、医療訴訟だけが残った。推定感染者数はわずか500人で、そのうち発症したのは12人、死亡したのは最初の19歳の二等兵ひとりだけだった。97%以上が不顕性感染で、症状が極めて軽く、感染したのに発熱すらしなかったのである。しかし、ワクチン接種が原因で多くの死亡、副作用が発生したのであった。この年(シーズン)、1976年10月1日~翌1977年1月31日に発生したギラン・バレー症候群の患者数は全米で1,098人、このうちインフルエンザ・ワクチン接種者は565人で、通常の7倍も発症しており、ワクチンによる重篤な副作用!!であることは確実であった。この大失敗が原因でフォード大統領は失脚した(1976年の大統領選挙で敗北)とも囁かれている。



ワクチン接種を受けるフォード大統領
Presidential Diary & Museum より

『日本におけるインフルエンザ予防接種政策と実際』(1979年) (米国 The Journal of Infectious Diseases 1980)

このプレパンデミックの大失敗の後、3年後の1979年に、アメリカのCDC(Centers for Disease Control and Prevention 疾病対策予防センター)とNIH(National Institute of Health 国立保健研究所)は、学童に集団接種をしているという日本に調査のために来日した。翌年に報告された調査結果は、「子どもたちへの『集団接種は効果がある』、という研究データは日本には何もなかった。日本では空想的な効能を期待してインフルエンザ・ワクチンを子どもたちに毎年接種しているのだが、アメリカで日本と同じことを実行する価値はない」(J. Infect. Dis.(1980)141(2):258-264)という主旨のものであった(右上図)。



Influenza Immunization Policies and Practices in Japan
J Infect Dis. (1980) 141 (2): 258-264

1979年といえば、群馬県前橋市の小学生が、ワクチン接種当日の夜、重篤な痙攣発作を起したため、集団接種は急遽中止され、前橋市医師会・国立公衆衛生院の医師等からなる「前橋市インフルエンザ研究班」による調査が開始された年であり、その結果はいわゆる『前橋レポート』(1987年)としてまとめられ、『インフルエンザワクチンに社会的予防効果なし』と結論付けられたのでした。(健康通信しずおか No.6 参照)

「インフルエンザ・ワクチンは無効」とメディアが報じる(アメリカ、カナダ)

CDC(米国疾病対策予防センター)やFDA(米国食品医薬品局)の公式見解は「ワクチン株ウイルスと流行しているウイルスが完全に一致した場合(極めて稀)には効果が期待できるが、一致しないのが普通なのでワクチンはほとんど無効」ということである。また、CDCは「年間70~80例のギラン・バレー症候群が、インフルエンザ・ワクチンにより引き起こされている」と認めてもいる。カナダのCTVニュース(左写真)、アメリカのCNNニュースやCBSニュースでも、「H1型ワクチンを接種すると季節性インフルエンザの感染が倍増する。」「ギラン・バレー症候群が増加する。」などと報じている。以前の「健康通信しずおか」で紹介したMayer Eisenstein先生、Russel Blaylock先生同様、ワクチンの危険性を訴え続けているSherri Tenpenny先生(右写真)は「ワクチンの潜在的危険性が増加している。」「インフルエンザ・ワクチンは効かないので、リコールして回収すべき医薬品だ。」「過去40年間、ワクチンで減少した感染症、撲滅された感染症は一つもない。」等々、ホームページ上で訴えている(TENPENNYIMC.COM)。



おわりに

ワクチンを打たず、安全な果物・野菜・穀物を食べ、睡眠を十分とり、朝日を拝み・日光浴をして自前のビタミンDをつくり、深呼吸をし、軽い運動をして体を温め、「胸腺叩打」などの体に良いことをたくさんして、免疫力・自然治癒力を高めましょう。もし罹ってしまった場合には、風邪薬・解熱剤は飲まず、十分な水分と栄養をとり、ゆっくり休みましょう。 TRANSITION TO HEALTH(健康への変革) (理事長・医師 丸山正明)